『比較日本文化学研究』第10号（2017）

論　文

周防大島の移民と出稼ぎの基礎的研究

――沖家室『かむろ』の分析を中心に――

劉　　王奇思
広島大学大学院文学研究科博士課程後期

A fundamental study of the immigrant and migrant workers on Suo Oshima: based on the magazine "Kamuro"

LIU Wangqisi

Abstract: Okikamuro is a small island located adjacent to Suo Oshima in Yamaguchi Prefecture, Japan. However, many natives of the island left to find jobs or emigrated to other countries during the Meiji, Taisho and Showa periods. The main destinations were Hawaii, North and South Korea, Taiwan, and Manchuria. Based on a local magazine called "Kamuro", This paper analyzes the living conditions of these immigrants and the reasons for immigration. Further, This paper researches the living conditions of local islanders from the Meiji period to the Showa period interviews.
Keywords: Okikamuro, "Kamuro", immigrant, migrant workers

1　はじめに

山口県周防大島は瀬戸内海西部に位置する内海第三の大きな島で、江戸時代には帆船の重要な航路にあたり、また明治に入っては出稼ぎがきわめて盛んで、島民の半数は島外に出ており、現住者の大半も島外で生活した経験を持っている（宮本 1997:129）。

沖家室は周防大島東和町の附属島であり、現在人口は200人程度だが、3000人を超えた時代もあり、『かむろ』と題する雑誌が刊行されていた。1914年に創刊号を出し、1936年6月まで続き、119号を出して休刊している。様々な細かい取りきめはあるが、沖家室島民の啓蒙と島外各地にある者と島内に住む者との情報交換を主要な目的としていた（宮本ら 1982:670-671）。

『かむろ』第 10 号に掲載された「在外者の発展」は、「米國に於ては広大なる土地開墾者を出し、布哇朝鮮に於ては、大商人、大貿易家を得、台湾に於ては、漁業界の先覚者を作り更に未知の富源に對する研究に孜々として日もこれ足らざる青年健闘家の多くを有す」と述べており、その他にも、南満州、北米、南米に移民が数多く存在していた。

『かむろ』は当時の生活を知る超一流の資料である。島民の生老病死、人員移動、毎日の出来事がほとんど記録されており、『かむろ』から、当時、沖家室の人々がどれほど頑張ったのか、海外で働いた人たちがどのような生活を送っていたのか等々が考察できる。また、海外生活を体験した人々が島の文化にどのような影響を与えたのかということも考察できる。

周防大島の移民と出稼ぎを研究する者は多くないが、その中に民俗学者の宮本常一がいた。岡本定との共著『東和町誌』によると、出稼ぎに関して東和町の中でもっとも特異な形をとっていたのは沖家室であった。江戸中期以来沖家室は漁業民としての出稼ぎが盛んであった。釣漁で生計をたてるためには島に定住することはゆるされなかった。魚を追って移動しなければならないからである。中には出先によい居住地を見つけて移住する者も少なくなかった（宮本 1997:596）。

また、出稼ぎ者たちからの送金については、『東和町誌』（73 頁）は下記のように記している。

> 海外にある者がおなじ大正三年に大島へ送った金は三二万六三〇三円にのぼった。今日の貨幣価値に引きなおせば四億五〇〇〇万円をこえることになるのではなかろうか。それだけではない。小包の量もまた多かった。ずっと後になるが、昭和二二年、戦後日本がもっとも窮乏していたときに、ハワイ・アメリカから大島に送って来た小包の数は二万七三二六個、そのうち東和町に送られて来たものが、一万一四一八個にのぼった。郷里の血縁の生活を援助するためのものであった。

島民たちの話によると、全国的にはまだ蛍光灯が普及していない時代に、大島の島民たちはすでに蛍光灯を使っていたという。それは全部海外にいる者たちのおかげであった。

大島町役場発行した『周防大島町誌　復刻版』では、明治期に海外移民する要因について、主に以下の四点を述べている。第一に人口過剰、第二に 1877 年の西南戦争後の紙幣乱発による経済の不安定、第三に賃金下落および

就職困難による生計の困難。第四に自然災害による農作物の収穫不足である。

2　ハワイへの移民と出稼ぎ

ハワイでは、19世紀の半ばから砂糖産業が急速に発達した。そのためハワイは多くの労働力を求めたが、ポリネシア系原住民の人口減のため、その多くを外国からの移民に求めた。ハワイの王、カラカウア王は、サトウキビ労働者として日本人に注目した。日本移民の受け入れを望んだハワイ政府は日本政府と交渉を重ね、ついに1884年日本側は日本人の渡航を承諾し、直ちに移民の募集を始めた。1885年1月には、日布移民条約が結ばれ、ハワイへの移民が公式に許可される。

大多数の官約移民や私約移民はサトウキビ耕地における3年契約の労働を主目的とした農業移民であり、ハワイ糖業の隆盛をもたらした。期限終了後も残留した者がおり、その後の呼寄せ移民、自由渡航者および二世等とともに耕地労働にとらわれず、商工水産の各種産業に進出していった。

日本移民は、ハワイ官約移民が当時「出稼ぎ人」と呼ばれたように、家族への送金と事業資金獲得が主目的であった。移住先からの送金は、留守家族だけでなく送出地域をも潤した。

ハワイ移民資料館副館長の藤元良哲氏によると、1885年頃のハワイ移民者たちは、朝4時ごろから夕方7時まで仕事をしており、日本にいた時と同様に大変な苦労をした。しかし、同じ苦労をするならばハワイで苦労をしよう、給料も日本の三、四倍もらえるということで、多くの人々が移民に応募した。土井彌太郎の『山口県大島郡ハワイ移民史』によると、官約移民初期には、沖家室島のハワイ官約移民の募集に応じる者がほとんどいなかった。1885年1月第1回船渡航者数は1人であり、1886年1月第3回船渡航者数は2人、1887年11月第4回船渡航者数は4人であった。少ないというよりむしろ、ほとんど居なかったといったほうが適切だが、大正に入ってから、沖家室島の布哇への移民が増えてくる。

『かむろ』のデータによると、ヒロとホノルルでは漁業に従事する人が一番多い。また、ヒロはホノルルより商業従事者が多い。さらに沖家室の移民と出稼ぎ者はハワイに渡った人数が一番多いため、『かむろ』ではハワイに関する記事がもっとも多い。『かむろ』第7号（1916年）の「布哇通信」によると、1916年、日本人はヒロ市の総人口の41.20%、ホノルル府の23.17%、ハ

ワイ全島の39.45%を占めている。

日本移民者と出稼ぎ者のほとんどは、家族と自分の生活を豊かにすることを主目的としている。その移住先からの送金により、留守家族の生活だけでなく、地域も大きく変わった。送金に関して、まずその数字を見てみる。

表1　大島郡海外出稼ぎ者数（宮本ら 1982:807）

	ハワイ（人）	アメリカ（人）	中国（人）	その他（人）	計（人）	送金額（円）
1912	3714	808	291	118	4931	158277
1913	3764	863	287	136	5052	213854
1914	3804	946	362	149	5261	226303
1915	3873	1226	380	408	5887	303213
1916	3912	1036	369	293	5610	597782
1917	3854	1344	-----	875	6073	561554

表1から見ると、1912年、大島郡海外出稼ぎ者は一ヶ月一人につき2円67銭、1913年3円52銭、1914年3円58銭、1915年4円29銭、1916年8円87銭、1917年7円70銭の送金額を送っていたことがわかる。1916年に関して見れば、日本全国ではハワイからの平均送金額が5円であったことに対し、大島郡ではハワイからの平均送金額が8円87銭であり、全国の1.77倍であった。現在の貨幣価値に直せば一ヶ月一人につきの平均送金額が約8000円を超えることになる。一見それほど驚くべき数字ではなかろうが、当時の島民の収入をはるかに超えた数字であった。また、後年になるが、1929年では、ハワイホノルルに在住していた中田由松や大谷松次郎ら数十人によって米国製のグランドピアノ一台が沖家室小学校に寄贈されている。1932年に、周防大島にはグランドピアノが三台もあったという。現在、そのうちの一台がハワイ移民資料館に、もう一台が沖家室小学校に保管されている。グランドピアノ一台は200万円もする極めて高価なものだった。

しかし、移民者や出稼ぎ者からの送金が続き、またその額が多いことにより、沖家室の島民たちは送金に過度に依存するようになってしまった。『かむろ』第20号（1918年）の「布哇より一筆啓上」は、送金について沖家室島民を罵倒する移民の文章である。この記事は、島民たちが送金を使って贅沢な生活を過ごしていることや、寄付金を不正に使用することはいかがなもの

かと問うている。海外で力を尽くして働き、自分の好きな物も買わずに節約して故郷に送金したあげく、恋しい故郷の人たちに騙されるとはとんでもない話であろう。また、1920年9月に刊行された『かむろ』（号数不明）では自分で努力しなければ何も得られないと島民たちを批判する布哇通信が載せられている。さらに、第59号（1923年）には、「自分の尻は自分で拭へ」という記事も、何事もすぐ寄付金を要求する沖家室を批判している。移民たちは故郷のことを思いながら一生懸命働き、貯まったお金を大島に送ったが、大島島民たちはそれをあたりまえのことと思い込み、自ら働いて稼ごうとしなかったことが、海外移住者が不満を感じたところであろう。

ハワイに移民する原因は主に四つあると考えられる。まず、人口増加が激しく、食料が足りなくなるからである。次に、ハワイでの賃金が日本本土より高く、経済的豊かさが実現しやすいからということがあげられる。官約移民の初期の賃金は、『出稼人の心得書』によれば、男性一人一ヶ月15ドル、女性一人一ヶ月10ドルだった。賃金面では当時としてはよほど良い条件だと言える。契約期間は3年であるから、その間は失業する恐れもなかった。その後、日本でのインフレにより、貨幣価値が下がり続けたため、契約期間が満了してもまとまったお金を持ち続けることができた。ハワイに残る者もいれば、米国本土へ渡るものもいた。そして、ハワイに沖家室出身者が多数移民したことは先発移民の成功もあげられる。現地で新しい事業を始める者も増えた。ハワイに渡り、英語が出来なくても、周囲に日本人が多くいるから何も恐れることなく安心して働くことができた。また、『かむろ』を読むことで、ハワイの事業発展の利点を知ることができ、先発移民の成功が刺激となり、自分も成功者になりたい、より良い生活を送りたいという気持ちが膨らみ、ハワイに移住または出稼ぎに行く者が少なくなかった。また、ハワイは海によって囲まれているため、漁業ができるということもあげられる。漁業しかできないと思っている沖家室の島民たちにとって、ハワイはよい漁場に見えた。沖家室島の人口増加により、漁業が狭隘になりつつあった当時、ハワイで漁業に従事することも期待できた。

3　朝鮮への移民と出稼ぎ

1910年8月29日の大日本帝国による韓国併合から、1945年9月9日の朝鮮総督府の降伏まで、朝鮮は日本が統治しており、35年間続いた。

日本統治時代の朝鮮は日本本国からの農業移民を募集した。ハワイ・アメリカに渡航し、稼いだ金を資金として朝鮮で新しく事業を始める人も少なくなかった。

しかし、『かむろ』の統計から見れば、農業に従事する人数はほとんどいなかった。また、1914 年から 1916 年にかけては、漁業に従事する島民も少なかった。朝鮮へ渡航した沖家室島民は、沖家室での本業をそのまま朝鮮に移し、続けて経営するのが一般的であり、商業をはじめ、大工職、醸造業、運送業、船乗業を営む者が多かった。漁業は幕末まで沖家室の主要な産業であったが、明治に入り、歴史の表舞台から退く。なぜなら、漁獲物の処理方法が問題となったからである。釜山などには魚市場が開設され、販売することができたが、漁場が遠く離れている場合には、塩藏や乾製にして内地へ輸送するか、朝鮮人の出買船に捨売する以外に方法はなかった。漁獲物の価値を高めるためには、塩干加工の陸上根拠地が必要であった。また帆船から発動機船へと鮮魚運搬船の高速化も求められた（内藤 1992:15-16）。『かむろ』の情報から見ると、1914 年から 1930 年までの間、朝鮮で漁業に従事する島民が出たのは釜山と龍岩浦だけであった。

朝鮮移民において商業に従事する者が最も多かったことは述べたが、朝鮮人参の多産により、朝鮮人参を販売する者も増えた。『かむろ』第 15 号の「開城通信」は、開城では朝鮮人参の耕作や販売の面で、内地で働くより儲かると述べている。

沖家室出身の木村勇次郎は朝鮮人参の販売による成功者の一人であり、「人参界の覇王」と呼ばれていた。事業に成功した彼は、故郷の沖家室のことを忘れることなく、何度も寄附金を送り、故郷の発展に大いに貢献した。木村だけでなく、他にも沖家室の発展に知恵を絞った移民も多数いた。『かむろ』第 26 号と第 27 号には「朝鮮名士の本島発展策」が掲載されている。「既に屋根に小麦馬鈴薯を栽培し」、「成績良好」という事例があることから、沖家室の経済を改良し、「屋根を利用して、何か耕作する方法を研究する」ことが、沖家室を発展させると考えられていたことがわかる。また、「何れの地でも家室の人が沢山成功されるなら、それだけ沖家室の領分が広くなつたと同じ事です。恰も、大日本帝国が台湾をとり樺太を譲りうけ、朝鮮を併合した様なものですね。さうなつたら此の周圍一里の家室の島が、何方里何十方里の大領地を有する事となるのですね」と考える者もいた。沖家室出身の成功者が

故郷のことを忘れず、色々な発展策を考えていたことは実に沖家室島民にとって喜ぶべきことであろう。

沖家室島民が朝鮮に移動する主なる原因が当時朝鮮が日本の植民地になったという事情は当然である。日本統治時代の朝鮮では、出稼ぎより、移住して事業を発展したほうが儲かった。植民地である朝鮮へ多くの移民が渡ることにより、朝鮮は実質上、日本の一部に変わっていった。

4　台湾への移民と出稼ぎ

台湾も朝鮮と同じく、日本の植民地であった。台湾の日本統治時代は、日清戦争の下関条約によって台湾が清朝から日本に割譲された1895年から、第二次世界大戦のポツダム宣言によって台湾が日本から中華民国に編入された1945年まで続いた。台湾総督府が行った国勢調査によると、日本から台湾への移住は1910年から本格化し、1940年には31万2122人の日本人が台湾に居住していた。（吉原ら 2013）

1914年の旧家室西方村における海外出稼ぎ者数は以下のようになっている。

表2　1914年旧家室西方村における海外出稼ぎ者数（宮本『東和町誌』による）

ハワイ	471	アメリカ	51	ペルー	6
フィリピン	23	メキシコ	15	清国	166
朝鮮	1040	台湾	122	合計	1894

旧家室西方村は地家室村、沖家室島、西方村と外ノ入村からなっている。1914年に旧家室西方村における台湾への出稼ぎ者数は122人であり、『かむろ』のデータでは同年の沖家室における台湾への出稼ぎ労働者数は80人である。すなわち、旧家室西方村における台湾への出稼ぎ者の半分以上は沖家室の島民であり、比較的に多かった。

『かむろ』第2号（1915年）では基隆での惺々会支部からの投稿があった。1915年頃には、沖家室島民たちは台湾へ移住または出漁する人が多くなかった。そこで基隆支部は、台湾は良いところであり、稼げるところであると沖家室島民の移住と出稼ぎを誘った。

『かむろ』によれば、台湾は他の移住先と違い、職業の種類が少ない。ほと

んどは漁業に従事していたことが推測できる。

第 15 号（1918 年）の「打狗通信」が記す釣上げについての報告からは、1917 年 8 月から 1918 年 1 月までの期間、打狗では平均 270 ～ 280 円の収入はあったことがうかがえる。この金額は当時の沖家室島民にとっては非常に大きな収入であり、台湾出漁の大きな要因と考えられる。1919 年になると、景気が良い時は「一本のがしきを釣れば、それが四十円五十円」になったという。

吉原和男ら（2013）は「台湾渡航者は、台北などの都市部に居住することが多く、農業や漁業に従事する人よりも官公吏、教員、会社員、工場労働者、商店の従業員などの雇用者になる人が多かった」と述べているが、それは日本全国各地からの台湾渡航者であり、沖家室島民は事情が違った。『かむろ』の統計結果から見れば、台湾に渡った島民たちはほとんど漁業に従事した。台北に居住する人はほとんどおらず、高雄、基隆に在住する人が多かった。高雄は基隆とともに台湾の二大商港である。高雄は基隆よりももっと条件の良い漁場であった。漁期が長いので安定した漁場あり、定住の形式で漁業をおこない、金と時間の余裕があれば沖家室を訪問することにしていた（宮本ら 1982:672）。

漁業のほかには、漁業に関連する産業の開発についても移民たちは考えた。第 24 号（1919 年）の「基隆通信」は鰹節製造業の経営を提唱している。沖家室島民の多くが研究心を持たないことで、沖家室が停滞している主な原因だと考えた。かつお節製造業は生魚の処理方法であり、島民たちの新しい事業にもなると訴えた。しかし、かつお節を製造するには、時間と資金がかかる。結局、この記事以降も、かつお節製造業者は出てこなかった。

新しい事業を紹介するほか、移民たちは第 40 号（1921 年）で島民に対して高等教育を受けるように勧めた。知識は運命を変える。このことを知った台湾移民たちが沖家室島民にもっと勉強せよと提唱したのであろう。

また、第 47 号（1922 年）は高雄より石油発動機船の利点が伝えられている。

台湾高雄は沖家室島民が好んだ出漁先であり、収入も良かった。そこで出漁していた移民たちが石油発動機船を沖家室の漁民たちに勧めた。沖家室の衰退している漁業を挽回したかったからである。

沖家室島民が台湾に移住または出稼ぎした最も重要な原因は、台湾が良質

の漁場であったからだと考えられる。沖家室島は狭く、耕地も少ない。しかし島周辺の海はすばらしい漁場だったので漁業が発展した。だが島の人口は増加する一方であり、人口過剰が漁業疲弊の最大の原因となり、台湾への出漁が解決策とされた。

台湾での高い漁業成績は、沖家室島民を次から次へと台湾に呼び寄せた。『かむろ』掲載の台湾通信は収入金額を示している。これらの数字が沖家室島民に大きなインパクトを与え、島民たちの進取心をそそったことがうかがれる。それゆえ、馬関組と伊万里組の漁業成績がよくなった時、台湾の出漁は少なくなる。

当然のことながら、台湾が日本に近いことも挙げられるであろう。台湾に出漁している者のうち、家族を連れる者は移住した者が多く、独身の者はほとんど出稼ぎの形であり、半期あるいは一年ごとに帰っていた。どちらにせよ、台湾から沖家室に帰ることが簡単であるからこそ選んだ出漁の形と考えられる。

5　その他の地方への移民と出稼ぎ

満州移民または出稼ぎは満州国が日本の植民地となった歴史背景のもとで行われた。満鉄（南満州鉄道株式会社）での出稼ぎを中心に論じていこう。満鉄は当時満州国に存在した日本の特殊会社であり、満鉄で働くことは一種の誇りであった。日本にあまり知られていない沖家室島民が有名な満鉄で働くならばなおさらただった。

沖家室蛭子神社のすぐ隣に一軒の商店がある。今年で93歳に磯部トシコ氏が住んでいる。磯部氏は1944年19歳に新京（現在の長春）の満鉄に出稼ぎし、敗戦二年後の1947年に沖家室に戻ってきた。22歳頃の時だった。

なぜ出稼ぎしたかと尋ねると、磯部氏は「支那事変が始まってから、沖家室島の店が駄目になって、島民はほとんど閉店して出ていった。兄さんが大学を卒業してから満鉄で働くことになって、そして両親も大変だし、満州がいいなと思いながら行った」と答えた。満州に行く際、下関から船に乗った。周りがみんな日本人であり、知り合いも数多くいたため、怖いとは思わなかったそうである。

生活面では沖家室島と全然違った。戦争が始まり、沖家室島に食料がほとんどなくなった一方、満州ではそのようなことはなかった。働ければ食べる

ことができた。満州には日本人向けの学校もあった。満鉄は寮や社宅のほかに、食堂もあった。満鉄での仕事は、女性はほとんど事務職であり、男性は鉄道建設に従事していた。当時の満州在住の中国人たちは小学校から日本語を学んでおり、日本人の出稼ぎ労働者たちも中国語を覚えたため言葉は通じた。磯部氏は現在でも中国語の数字の数え方や生活用語は覚えている。

敗戦以前、日本人は満州人と仲が良かった。敗戦後、中国人の態度は変化はしたが、よくしてくれた人もいた。中国に永住する考えはなかったのかと尋ねた時、磯部氏は「敗戦したから、日本人として外国でいられないと思っていたから、戻ってきた。満州での生活はよかった。でも、両親は島に残っていた。敗戦で帰った時、何にもない島にいた親たちは大変だったと思っていた」と答えた。

島に、結婚して子供を連れて帰ってきた男性は数多くいた。帰ってからまた島を出る人もいた。磯部氏は満州から戻り、家政婦として九州へまた出稼ぎに行った。二年後に、結婚するため、また沖家室に戻った。島外で働きそこに残る人もいるが、やはり故郷に戻りたいという気持ちのある人が多く、定年後島に帰ってきて、年金で生活した人や漁師として生活を送る人もいた。

膠州湾及び南支那への出稼ぎ労働者と移民は、ほとんど漁業に従事したということが『かむろ』より考察できる。1919 年から南洋群島は日本の委任統治領となったが、日本から離れており、まわりに朝鮮、台湾といった良い移住先もあるため、南洋に移住した沖家室島民はそれほど多くなかった。アメリカ本土や、カナダ、南米ブラジルには多くの日本人が移住したが、沖家室島民はあまり行かなかった。

海外だけでなく、沖家室島民の本土内の出稼ぎも盛んだった。内地への出稼ぎは江戸中期から始まり、最初は漁民としての出稼ぎが多かったが（宮本ら 1982:466）、1914 年からは、様々な事業に従事している。出稼ぎ先は主に九州方面、山口県、愛媛県、近畿地方と関東地方であった。

6　おわりに

一般的に、海外移民には 2 つのタイプがある。A タイプは、後進地域に植民者、開拓者または支配者として移住していく場合であり、B タイプは、先進地域の最底辺に低賃金（といっても、日本国内における賃金よりは高い。）労働者として移住していく場合である。日本の場合、朝鮮、台湾、満州など

への移民はAタイプであり、ハワイ、南北米などへの移民はBタイプである（松本 1990:150）。

沖家室の場合は、Aタイプの移民が多く、Bタイプの移民はハワイのほかはほとんどいなかった。また、沖家室は戦後出漁にいくことが少なくなり、沖家室付近の海で稼ぐようになった。若者は労働者やサラリーマンになり、島に残った者は老齢化した（『東和町誌』p.881）。戦後、日本の朝鮮、台湾、満州における植民統治と、南洋群島の委任統治が終わった。沖家室にとっては日本の植民地ではなくなった台湾、満州への出漁が減少したということになる。つまり、敗戦前には、台湾や満州を日本が統治していたからこそ移住または出稼ぎができたということである。

最後に『かむろ』についてまとめておこう。『かむろ』に掲載されている記事の量からもわかるように、号数が増える一方、枚数が減り、海外や出稼ぎ先からの通信も減少した。第71号（1926年9月）と第72号（1927年10月）は約一年間の期間が空いた。第72号では「会誌発行不要論に就て」という文章が掲載され、「此不要論者の云ふ処は共に現在の自己を中心として現在の自己に直接益する処なしと云ふに在る」と言う文章も掲載されている。

しかし、会誌の通信量はその後も改善しなかった。第105号（1934年7月）から、会誌の表に沖家室の写真を使うようになる。第108号（1935年5月）の「はがき通信」では、カナダ在住者から「家室の写真を会誌で見て一人郷里に懐みが起こります。我々の様に長らく波濤万里の異郷に在る者には何よりの慰安となります、休まず次ぎ次ぎに出して欲しいです」の一言があった。

だが、残念なことに、『かむろ』は第119号まで出版されて以後休刊している。主な原因は二つある。一つは資金不足である。『かむろ』には、それを訴える編集室の声が何回も掲載されている。もう一つは、掲載記事の多くは日常茶飯事に関するものであり、面白く懐かしい内容だろうが、23年間も続いたならば、退屈なものに映ったのであろう。

今後の課題としては、島に残された女性たちはどんな生活を送っていたのか、また女性は家庭内での立場、島民の女性観について研究していきたいと考える。

付記

本研究は中国国家建設高水平大学公研究生項目の助成を受けたものである。

参考文献

論文・著書

伊藤隆・百瀬孝 2010『史料検証 日本の領土』河出書房新社.

移民研究会 1994『日本の移民研究――動向と目録』日外アソシエーツ.

移民研究会 2008『日本の移民研究――動向と文献目録Ⅰ 明治初期－1992 年 9 月』明石書店.

大島町 1994『周防大島町誌』大島町役場編.

木村健二 1999『在朝日本人の社会史』未来社.

斉藤広志 1978「ブラジル移住の意義と将来」『海外移住の意義を求めて《ブラジル移住 70 周年記念》――日本人の海外移住に関するシンポジウム――』外務省・国際協力事業団.

田中俊明 2008『朝鮮の歴史－先史から現代』昭和堂.

中国新聞『移民』取材班 1992『移民～中国新聞創刊 100 周年記念企画～』中国新聞社.

土井彌太郎 1980『山口県大島郡ハワイ移民史』マツノ書店.

内藤正中 1992「明治期島根漁民の朝鮮海進出」『経済科学論集』18:1-20.

泊清寺（住職 新山玄雄）2001『かむろ復刻版 第一巻』泊清寺

泊清寺（住職 新山玄雄）2002『かむろ復刻版 第二巻』泊清寺

泊清寺（住職 新山玄雄）2004『かむろ復刻版 第三巻』泊清寺

松本俊郎 1990「木村健二『在朝日本人の社会史』」『岡山大学経済学会雑誌』21(4): 143 ～ 153.

宮本常一 1997『周防大島民俗史』未来社.

宮本常一・岡本定 1982『東和町誌』山口県大島郡東和町.

吉原和男・吉原直樹・蘭信三・伊豫谷登士翁・塩原良和・関根政美・山下晋司 2013『人の移動事典 日本からアジアへ・アジアから日本へ』丸善出版株式会社.

若槻泰雄・鈴木譲二 1975『海外移住政策史論』福村出版株式会社.

雑誌

黒頭巾（1923）「自分の尻は自分で拭へ」,『かむろ』1923 年 10 月号, p.12, 冲家室惺々會

台湾人（1921）「高雄より」,『かむろ』1921 年 10 月号, pp.31-32, 冲家室惺々會

○○生（1922）「高雄より」,『かむろ』1922 年 10 月号, p.23, 冲家室惺々會

TY 生（1919）「朝鮮名士の本島発展策」,『かむろ』1919 年 9 月号, pp.4-5, 冲家室惺々會

TY 生（1919）「朝鮮名士の本島発展策（下）」,『かむろ』1919 年 10 月号, p.5, 冲家室惺々會

「布哇通信」,『かむろ』1920 年 9 月号, p.25, 冲家室惺々會